北海道の広さ

東条猛猪

このごろ、あらためて北海道の広さの有難さを感じる。面積が広いため、産業開発と自然保護とが二つながら、ともに達成できる可能性があるからである。

いかに公害の防止や環境の保全に配意しても、工業開発に重点がおかれる地域では、自然美を保護造成することは至難である。生産の増加・経済の高度化など、道民の物的な生活向上のため自然が損われるのである。

この工業開発と併行して、北海道には、開発の進め方に思慮と勇気があれば、自然を保護し、積極的にかん養できるだけの広さがある。要は道内各地域の自然環境から生まれるそれぞれの特色を素直に直視して、その地域にもっとも適合した施策をとることである。それは農畜・教育文化・社会保健を指向するなどいろいろあろうし、ところによっては自然のまま放置することである。自然のまま放置して〃いわゆる開発〃をおさえることが、その地域の自然を保護かん養して、その地域を真に開発することである。

産業開発と自然保護を両立して実現するためには、思慮と勇気を必要とするに違いない。その思慮とは、真の開発とはなんであるかを、北海道の自然に立脚して正しくつかむことから発するであろう。その勇気とは、一時の便益からの反論に屈せず、正しきは貫く心がまえであろう。この点で大通をはじめ、広いスペースを持った札幌をつくった明治初期の先人の先見力と企画力には、頭の下がる思いがする。

自然保護は最近、全国的に盛んに唱えられるようになった。喜ばしいことである。しかし、時に具体性のないさわりのよい抽象論を目や耳にして、なんとも空しさを感じることがある。自然保護はさわりのよい抽象論の中で実現できるものではなく、摩擦や反対を伴うことが普通である。北海道自然保護協会は、たとえ微力でも北海道の現実に即した具体的、建設的な活動をつづけたいものである。

（会長）